都の眼

竹久夢二

留吉(とめきち)は稲田の畦(あぜ)に腰かけて遠い山を見ていました。いつも留吉の考えることでありましたが、あの山の向うに、留吉が長いこと行って見たいと思っている都があるのでした。

そこには天子様のお城があって、町はいつもお祭りのように賑(にぎや)かで、町の人達は綺麗(きれい)な服をきたり、うまいものを食べて、みんな結構な暮(くらし)をしているのだ。欲しいものは何でも得られるし、見たいものはどんな面白いものでも、いつでも見ることが出来るし、どこへゆくにも電車や自動車があって、ちょっと手を挙げると思うところへゆけるのだ。

おなじ人間に生れながら、こんな田舎(いなか)で、朝から晩まで山ばかり見て暮すのはつまらない。いくら働いても働いても、親の代から子の代まで、いやおそらくいつまでたっても、もっと生活がよくなることはないだろう。牛や馬の生活と異(ちが)ったことはない。たとえ馬であっても都で暮して見たいものだ。広い都のことだから、馬よりはすこしはましな生活が出来るだろう。留吉(とめきち)はそう考えると、もうじっとしていられないような気がするのでした。

それから三日目の朝、留吉は都の停車場へ降りていました。絵葉書や雑誌の写真で見て想像はしていたが、

さて、ほんとうに都へ来てみると、どうしてこんなに沢山な人間が、集っているのだろう、そしてなんのためにこの大勢の人間は忙(せわ)しそうにあっちこっちと歩いているのだろう。ちょっと立っている間にさえ、自動車が二十台も留吉の前を走って行きました。

　唐草模様のついた鞄(かばん)一つさげた留吉は、右手に洋傘(こうもり)を持って、停車場を出て、歩きだしました。

「おいおい危(あぶな)い！」腕に青い布(きれ)をつけた巡査がそう言って、留吉を電車線路から押しだして、路(みち)よりもすこし小高くなった敷石の上へ連れていって、「電車に乗るなら、ここで待っていて下さい」と言いました。

そこには立札があって「帯地全く安し」と書いてあるのです。留吉は「呉服屋の広告だな」と思いましたが、帯地の安いことは留吉には用のないことでした。それよりも、今夜留吉はどこへ寝たら好(い)いだろうと考えました。

留吉は、小学校時代の友達で、村長の次男がいま都に住んで好(よ)い位置を得てくらしていることを思出(おもいだ)しました。

卒業試験の時、算術の問題を彼に教えてやったことがあるから、訪ねてゆけば、彼もあの時の友情を思出すに違いない。留吉は、昔馴染(なじみ)の友達の住所をやっと

思出しました。

そこは山の手の高台で、門のある家がずらりと並んでいるのでした。

二十四番地、都は掛値をする所だから、なんでも半分に値切って、十二番地、だなんて、村で物識(ものしり)の老人がいつか話してくれたのを思い出したが、まさかそれは話だと、留吉は考えました。

さて、二十四番地はどこだろう。

細っこい白い木柵(もくさく)に、紅(あか)い薔薇(ばら)をからませた門がありました。石を畳みあげてそのうえにガラスを植えつけた塀がありました。またある所には、まるで西洋菓

子のようにべたべたいろんな色のついた、ちょっと食べて見たいような西洋風な家もありました。紅い丸屋根をもった、窓掛の桃色の、お伽噺（とぎばなし）の子供の家のような家もありました。

二十四番地！　さあここだぞ。今田時雄（いまだときお）、ああこれだ、これが昔の友達、時公（ときこう）の家だ。白い石の柱が左右に立って、鉄の飾格子（かざりごうし）の扉（ドア）のような門がそれでした。まるで郡役所のような門だなと、留吉（とめきち）は考えました。

門からずっと玄関まで石を敷きつめて、両側に造花（つくりばな）のような舶来花を咲かせてありました。

「時公（ときこう）もエラクなったもんだな、算術なんかあんな

下手糞（へたくそ）でも、都へ出るとエラクなれるものだな」留吉は、昔の友達の門をはいって、玄関の方へずんずん歩いてゆきました。

すると、なんだか変てこな心持が、留吉の心をいやに重くしはじめました。変だぞ、留吉は生れてはじめて、こんな厄介な気持を経験したので、自分にははっきり解（わか）らないが、留吉はすこし気まりがわるくなったのです。それはたいへん留吉を不愉快にしました。

「時公におれは竹馬を作ってやったこともあるんだ。あいつはその事もまだ覚えているだろう」

この考（かんがえ）は、留吉をたいへん気安くして、元気よく

玄関の前まで、留吉を歩かせました。「御用の方はこの釦（ボタン）を押されたし」と柱の釦のわきに書いてある。留吉は読みました。

「おれは用があるのだ。それにここの主人はおれの友達だからな」留吉は釦を押した。ギリギリギリとどこか家の奥の方で音がしました。そういう仕かけかなと思って、留吉は、入口のガラス戸のとこを見ていますと、そこに一寸角ほどの穴があいています。そこで大きな一つ眼（め）がぎらっと光ったかと思うと、頭の上でギリギリギリと、舶来の半鐘のような音がしました。留吉はもうとてもびっくりして、何を考える暇もなく、

どんどん門の方へ駈(か)けだしました。

するとその拍子に、留吉の帽子が留吉の頭から飛去って、ころころと転(ころが)ってゆきました。こいつは大変だと思っていると、悪い時には悪いことがあるもので、造花の西洋花の中から、歯をむいたチンのような顔をした、しかしずっと愛嬌(あいきょう)のない大犬が出てきて留吉を追いかけました。

留吉は、十一番地のところまでまるで夢中で駈出(かけだ)しました。やれやれとそこで立どまると、あとから今田(いまだ)家と襟を染めぬいた法被をきた男が、留吉の帽子を持って立っていました。「どうも、これはお世話をか

けました」と言って留吉がその帽子を受取ろうとしますと、その手をぐっとその男は摑(つか)んで「ちょっと来い」と言ってペンキ塗(ぬり)の白い家へ連れてゆきました。椅子(いす)に腰かけた人間の眼が十三ほど、一度にぎろっと留吉の方を見ました。それは巡査でした。

「先程電話でお話のあったのはそいつですね」一人の巡査が立ってきて、法被の男に言いました。

「こいつですよ、旦那(だんな)」法被の男が言いました。

「私はその、なんにも悪いことをしたのではないですよ。その、私は、その、昔の友達を訪ねていったですよ。ただその、眼(め)が、眼がそのギリギリギリっと言っ

たでがすよ」留吉（とめきち）は巡査に言いました。巡査は髭（ひげ）を引張（ひっぱ）って言いました。

「お前は今田（いまだ）氏の昔の友達だと言うのだね。それに違いないか、何という名だ」。

巡査は今田氏へ電話をかけました。

「ははあなるほど、昔の友達だなどと当人は申して居（お）りますが……ははあ、いやわかりました。では、とりあえずですな、外（ほか）に窃盗などの目的はなかったものと推定して、放免することにいたしましょう。……はい……はい、どうもお手数をかけました。」チリンチリン

電話をかけ終った巡査は、また留吉の方へ出て、さ

て言うには、
「今田氏はお前のような友達は持ったことはないと仰言(おっしゃ)るよ」
「今田時雄(ときお)は、その、算術の試験の時……」
「もう好(よ)い。兎(と)に角(かく)この帽子はお前に返してやるが、今後は、他人の邸宅へ無断で侵入しては相ならぬぞ、よしか」
　留吉は、とある公園のベンチに腰かけて、つくづくと帽子を眺めました。
　この帽子が悪いのだ。とにかくこの帽子は、おれを今よりもっと不幸にするかも知れない。田の草をとる

時にも、峠を越す時にも、この帽子はおれの連だったが、今は別れる時だ。留吉は、帽子を捨てしまおうと決心しました。そこで、腰かけていたベンチの下へ、その帽子をそっとかくして、そこを立ちさりました。公園の門を二三間歩くと、

「おいおい」と言って巡査が追いかけてきました。

「これは、君のだろう」と言って、帽子を留吉に渡しました。

「いや、その、これはその……」留吉が、何か言おうとするうちに、もう巡査は、ほかの帽子か何かを探しにいってしまいました。

　留吉は、不幸な帽子を手に持って歩いているうちに、たいへん腹がへってきました。

「民衆食堂一食金十銭」と書いてある西洋館がありました。留吉は、そこへ這入（はい）っていって、隅っこのあいた椅子（いす）に腰かけて、帽子を卓子（テーブル）の上へおきました。

　十銭の食事が終ると、留吉は帽子を椅子の下へかくして、何食わぬ顔をして、出てきました。「君の帽子だろう」あとから食堂を出てきた車屋さんが、すっぽりと留吉（とめきち）の頭へ、帽子は（ママ）はめてしまいました。

　留吉は、長い間こがれていた都を見物することも、何か仕事を見つけることも、また昔のお友達を思出（おもいだ）す

ことも忘れてしまったように見えました。ただもう、どうして、この不幸な帽子と別れたものかと、その事ばかり考えて、知らない街を通(とおり)から通へと歩きつづけるのでした。

日が暮れて街の人通(ひとどおり)が少(すく)なくなった時分に、留吉は街はずれの汚い一軒の安宿を探しあてました。

「今度はうまくいったぞ」留吉は、宿の二階の窓から、裏の空き地へ帽子を投出しました。それで安心して、その夜はぐっすり眠ってしまいました。人の知らないうちに出立しようとおもて(ママ)、眼(め)をさますと、帽子は枕元(まくらもと)にちゃんとおいてあります。

留吉は、また不幸な帽子を持って、宿を立ちました。

留吉は、とある大川の堤（どて）の上を歩いていました。

「ここだ帽子を捨てるのは。川へ流してしまえば、もう返って来ないだろう」

留吉は、橋の上から力一ぱい帽子を川の中へ投げやりました。帽子は、小さな波に乗って、ぶっくりぶっくり、川下の方へ流れてゆきました。

「あばよ、おととい来いだ！」

留吉は、泣きたいような好（よ）い気持ちで、だんだん遠くなってゆく帽子に別れをつげました。すると一艘（そう）のモーターボートが、ポクン、ポクン、ポクンと言いな

がら、帽子の方へ走出(はしりだ)しました。ボートの中には、白い服をきた男が二人と巡査が一人乗っていました。まもなく帽子に追いついて、一人が帽子を救いあげると、急いでボートを岸へつなぎました。留吉があっけらかんとして見物しているうちに、帽子はいつの間にかまた留吉の頭の上へのっかっていました。

　留吉は、なぜか嬉(うれ)しくなって、不幸な帽子を頭へのっけたままで泣出しました。しかし、どう考えても、今田時雄(いまだときお)の玄関の一寸角のガラスの穴からのぞいた眼が、公園のベンチのうしろの木の蔭(かげ)からも、公衆食堂の椅子(いす)の下からも、宿屋の裏の空地にも、大川の橋の

下にも、いつもぎらぎらと光って、留吉のすることを見ているように思えるのでした。これは留吉には、たまらないことでした。

留吉が、不幸な帽子をかぶって、都の停車場からまた田舎（いなか）の方へ帰ったのは、それからまもないことでした。

（一九二三、七、二四）

底本：「童話集　春」小学館文庫、小学館
　　２００４（平成16）年8月1日初版第1刷発行
底本の親本：「童話　春」研究社
　　１９２６（大正15）年
入力：田中敬三
校正：noriko saito
２００５年9月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。